

プロジェクト年度納めに力作プラン堂々発表

八尾、喜多方で回を重ねるまちづくりの集い

●八尾「車座談義」に溢れる住民の思い●

2月25日、八尾町西町公民館にて第2回西町まちづくりフォーラムを行った。参加者は、西町住民、商工会、西村幸夫教授、都市デザイン研究室八尾チームを合わせて、30人ほどである。最初に、全体計画を中島直人助手が、個別計画を各提案担当者が説明した。その後、今回のフォーラムのメインイベント「車座談義」が行われた。4つの座卓を各班6、7名（住民4、5名、八尾チーム2名）で取り囲み、興味ある5つの提案に対し白熱した議論が交わされた。途切れることなく続く議論は、住民の西町への熱い思いを再確認させた。

最後に、西村教授より今後の西町まちづくりへの方向性が示されるとともに、住民を代表して福井堅二さんから、「今回の提案をもとに住民が西町のまちづくりを継続して行うことを約束する」との言葉があった。しかし、ここからがまちづくりの本番である。まだ第一歩を踏み出したにすぎない。西町が住民にとって住みやすく、そして住み続けられる町となるよう、今後も我々八尾チームはサポートしていくつもりである。（後藤健太郎 M1）

■八尾町・石垣風景の将来イメージ（後藤画伯・渾身の力作）



■市役所通りのプラン

●成長着々、「喜多方まちづくり研究会」●

2月19日に、「第3回喜多方まちづくり研究会」を開催しました。喜多方の住民、市、福島県、TMO等、多くの方々（過去最多の約30名）にお越しいただきました。私たちが1年間かけて考えてきた喜多方全体プランと地区プランについて、有意義な議論をすることができました。

その後の懇親会（2次会）では、M2の3名が、喜多方のまちづくりに関わってきた2年間を振り返り、卒業を前にした今の思いを熱く語り…喜多方のみなさんから温かい拍手に包まれたのでした。

（鈴木智香子 M1）

<懇親会でのヒトコマ> こ洒落たバーで、しっとりなごやかに労をねぎらい合うのが恒例の懇親会。その席で、「われわれデザイン研の学生は、5年間喜多方に関わってプランをつくってきた。次はいよいよ、これを受けて、当事者の喜多方市行政・市民がアクションを起こすとき。それこそが本番だ」と一座に咆哮した黒瀬 M2（写真右）。酒席を、安易な「おつかれさま」の応酬に終わらせることなく、まちづくり意識醸成の場としてしっかり活かすプランナー魂、貫禄的一幕。



都市デザイン研究室の光

張天新 (2002年に博士課程卒業、現在、北京大学に勤務)

卒業してから何も業績もないままで恥ずかしいと思いながら、2005年8月、三年半ぶりに家内と一緒に東京へ行きました。東大のキャンパスに入って、十四号館に上ってまず九階のいつも研究室会議が行われた部屋、そして十階の、いつも頑張ったり寝たりした部屋を訪問しました。どれもあまり変わらないままで、家内にあちこち案内し、ここで何をやった、あそこに何があったと、記憶を呼び起こさせられました。寝ていた毛布は姿を消していましたが、ソファは喜ぶべきことに捨てられていません。

すごく暑かった日なのに、お昼は西村先生にご馳走になりました。いつもの忘年会会場と近い場所ですが、忘年会の日本料理とは違ってフランス料理でした。料理はおいしくて高かったでしょうが、先生とのお話はその料理よりも貴重でした。同じ中国からの留学生の韓さんとも会って話をしました。彼は私よりずっと活躍しているようであらやましいです。

二、三日後、中島助手さんをはじめ、15人もの研究室OBたちに、上野の高級料亭でご馳走になりました。あの露台から東大を眺めることができ、その光は魅力的でまるで都市デザイン研の光栄を物語っているようでした。報告するべきことはあまりなかったのですが、ひとつだけ誇りに思うのは、かわいい男の子を生んだことです。名前は笑夢です。

皆様と別れた後、また横浜、鎌倉、江ノ島、箱根、浜松、京都、大阪など、私の好きな場所に次々と家内を案内しました。家内も私もこの旅でますます日本が好きになりました。しかし、その中、一番心に残っているのはやはり東京での先生をはじめとする皆様との再会でした。皆様の笑顔と話し声がこれから私の暗い夜を照らし、笑夢を送っていただくものとなっていくと信じています。

■実現成るか!? 浅草西部の商業・観光拠点「まち案内所」

浅草の小さな商店街が、奮闘中。昨年8月開通のつくばエクスプレス(TEX)・浅草駅の出口を抱える六区花道商店会が、浅草の西の玄関口となる「まち案内所(仮称:浅草文化・商業センター)」を設置しようと運動している。2月13日に行われた商店会総会では、今年夏の開業に向けて、会員の意思統一。続いて開かれた懇談会では、浅草の名士が顔をそろえるなか、アドバイザー的立場の中島助手が立ち上がり、プレゼンテーション。施設の必要性を、力強く訴えた(写真)。



◆4年生インタビュー◆ <第7回(最終回)> 石井くん

出身は神戸六甲アイランド。更地が成熟した都市となり、さらに、震災を経て復興するさまを、見て体験したことが、都市計画を志す大きな動機となっています。

デザイン研を選択した理由は、実践志向とメンバーのモチベーションの高さです。

卒業研究は「サウンドスケープの保全に関する研究」、誰も手がけていないことを、とテーマを選びました。

振り返ると「調べ、分析し、考えたこと」と「論文としてまとめあげること」がうまく結びつかなかった気もしますが、研究を通して大きく成長できたことはたしかです。

大学院での目標として、プロジェクト参加を通じてプランナーとしての実践的な力を磨くこと、卒業研究をさらに磨き、「人に負けない」自分のフィールドを作ること、2つを考えています。

若手OB・現役院生、著書続々の活躍!

▼新刊「日本の街を美しくする 法制度・技術・職能を問いなおす」(学芸出版・3990円)

景観法全面施行を契機に、「良好な景観の創出に貢献するデザイン手法あるいは技能」(「まえがき」)確立への一里塚として編まれた書。当研究室2001年修了のOB三牧浩也氏(現(株)日本都市総合研究所勤務)が「第2章 街を美しくする都市デザインの条件」中、「2.1 街並み景観をダメにしている公共施設のデザイン」を、鈴木智香子M1が「第8章 景観をつくる都市計画の条件」中、「8.2 都市計画が壊した都市景観事例とその課題」を、それぞれ担当している。

▼再版「まちづくり101の提案カード」(横浜まちづくり倶楽部・3150円)

横浜のまちの現況や、まちづくりのヒントになる提案をスタイリッシュにまとめたカード集。北沢教授、OB遠藤新氏(元助手・現金沢工業大学講師)がカード作成に関わっているほか、OBの片岡公一氏(2004年修了)、關佑也氏(2004年修了)が作成協力者に名を連ねる。



編集後記

先号修論に続いて、今号はプロジェクトの成果物、卒業論文・設計、新著。「実りの秋」という言葉を以前使ったことがあるが、年度末の実りは秋にも増して豊かで、「冬」「オフ」という言葉は研究室の暦にはないことを知った。出張前夜に集結して氣勢を上げた八尾チーム9人の熱気を未だ微かに残すかのような共用大机の上で、「原稿不足」の懸念一転、発行直前になって続々出てくるネタを四苦八苦紙面に押し込みながら迎えた誕生日であった。(坂内)